



歴史



■中央公論新社  
■2019年1月刊  
■定価 920円+税

## ハンニバル戦争

佐藤 賢一 著

古代ローマ史の「ハンニバル戦争」がヨーロッパ列強の陸軍士官学校の戦術史演習に教材として使われていたという。なぜか。具体的なところは、国防上の軍事機密になるのだろうか、わからない。管見であるが、古代世界で屈指の名将ハンニバルの戦術の巧みさが、現代戦に挑む指揮官の究極的な判断力と何らかで関係しているのかもしれない。

紀元前11世紀初頭にイベリア半島の大西洋岸の町カデイスを建設したのはフェニキア人だった。その末裔に当たるカルタゴ人が紀元前700年頃からイベリア半島南部に定住するようになり、北アフリカの地中海沿い一帯にその支配権を確立し「地中海の女王」と謳われるほどになる。やがて、イタリア半島を平定した新興国ローマが、地中海の覇権をめぐる、カルタゴと正面から激突する。それが3次にわたる「ポエニ戦争」である。第1次ポエニ戦争（前264-前241年）では海軍力の優勢なローマが勝利する。前219年、カルタゴ軍総司令官に任命された28歳のハンニバル（前247-183年）は父の遺志を継ぎ不倶戴天の敵であるローマの攻略作戦に着手、初陣としてローマの同盟都市サグントゥム（現サグント）を包囲攻撃する。この町はローマ軍の救出の

望みが途絶えたと判断し、降伏ではなく、自らの町に火を放って自害の道を選んだ。これが、第2次ポエニ戦争（前214-前201年）、別名「ハンニバル戦争」の発端であった。

ハンニバル麾下の、歩兵5万、騎兵9千、それに戦象40頭のカルタゴ軍が、徒歩でアルプスを越え、北からイタリア半島に侵攻する。緒戦は順風満帆。イタリア半島の東南地方のカンナエ（カンヌー）の戦い（前216年8月）で、5万のカルタゴ軍と8万のローマ軍が対峙し、戦史上最大の殲滅戦を展開した。ローマ軍に壊滅的打撃を与え、ローマ市内にあと一歩という地点まで追撃したものの、なぜか、決定的打撃を浴びせなかった。

本書『ハンニバル戦争』は、ハンニバルを怨敵と見なすローマ軍司令官スピキオ（前235-前183年）に焦点を当てて書かれている。彼はローマ軍の空前絶後の大敗北となったカンナエの戦いにおいて19歳の青年将校として参戦し、7万人もの味方の戦死者群をかいぐって、かろうじて敗残兵とともに脱出したのだった。実際に、ハンニバルの常識外の戦術を直に体験した後、それを徹底的に研究した。地形、気象といった自然環境の研究も怠らなかつた。イタリア遠征中のハンニ

バル軍の兵站線を断ち切るために、26歳のスピキオはイベリア半島制圧の指揮官に任じられる。カルタゴの本拠地であるカルタゴ・ノヴァ（カタルヘナ）を占領し、前205年にカデイスを制圧する。ついで前202年、ローマ軍はカルタゴの首府近くのザマの戦いで決戦を挑む。戦争はまたしてもカルタゴの敗北で終結する。今や敗軍の将ハンニバルもローマの権勢の及ばぬビティニア国に逃れる。だがローマは彼の身柄の引き渡しを強く迫る。前183年、ハンニバルは「ローマ人を不安から解放してやる」と言って毒杯を仰いだのだった。

ハンニバルを斃した「救国の英雄」スピキオはローマに凱旋するが、その後、彼は公金不正使用、越権行為などで元老院に告発される。また独裁者などと扱き下ろされた。結局、こうした理不尽な讒訴は解明され、断罪は免れたものの、政治生命は断たれた。憤慨のあまり彼は家族と別れてナポリ近郊に隠棲するが、不思議なことに、ハンニバルが自死したのと同じ年に、スピキオも燃え尽きてしまう。忘恩の祖国を断じて許すことなく、スピキオ家の墓に葬られることも拒否したという。

ともあれ、この2人の名将は実に壮絶な生涯を送ったのだった。

哲学

## 情熱の哲学 ウナムーノと「生」の闘い

佐々木 孝 著  
執行 草舟 監修



■法政大学出版局  
■2018年1月刊  
■定価 2,500円+税

ほぼ35年前のこと、ミゲル・デ・ウナムーノの研究で著名な佐々木孝さんからワープロで製作された「私家版」の、2冊の翻訳書が送られてきた。スペイン現代史の研究には必要不可欠な、サルバドール・デ・マダリアーガの名著『情熱の構造——イギリス人、フランス人、スペイン人』そしてライン・エントラルゴの名著『スペイン1898年の世代』であった。こんな重要な本はやはり「活字本」として流通させなくては、さっそく知り合いの出版社のれんが書房新社に「私家版」を持ち込み、話がまとまり、その出版社で初めて佐々木さんと会った。

いまでも記憶に残っているが、佐々木さんはなんとも穏やかな学者だった。彼は道産子で帯広出身、僕も同じ札幌出身。実に楽しい邂逅であった。

ところで、本書は、幻の名著『ドン・キホーテの哲学——ウナムーノの思想と生涯』（講談社現代新書、1976年）と、それ以前に発表した論文4本とエッセイを加えた2部構成になっている。

本書のタイトルの重要なキーワードである「情熱」は、スペイン人の「生」の基盤となっているが、このpasión（スペイン語）には、「情熱」や「激情」という意味ともう1つ「受難」という意味もある。ウナムーノの生涯を考える場合、pasiónの2つ

の意味が表裏一体、別言すれば、不即不離の関係となっている。

私が関心を持つのは、なんといっても、20世紀のウナムーノの「生」である。この世紀をわずか36年間しか生きなかつたが、その短い間にウナムーノは自らpasiónを体現したのだった。

1900年、36歳でヨーロッパ4大学の1つ、サラマンカ大学総長に就任。14年、政治的理由で総長罷免。21年、副総長に任命（24年まで）。24年2月、独裁者プリモ・デ・リベラによってカナリアス諸島に追放。31年4月、スペイン第2共和政の誕生後、帰国、サラマンカ大学の終身総長に復帰。36年7月、スペイン内戦勃発。

同年12月12日、サラマンカ大学で「スペイン民族祭」の祝典が行われる。壇上には、フランコ將軍夫人を筆頭に、外人部隊創設者アストライ將軍、サラマンカ司教など叛乱軍の錚々たる名士が臨席していた。その中にウナムーノも交じっていた。すでに彼は、叛乱軍による詩人・劇作家ガルシア・ロルカの虐殺、バダホスでの1,200人の共和派の大量殺戮などを知悉していた。共和派に対して罵詈雑言を浴びせる演説が続き、聴衆から外人部隊の関の声「死よ、万歳！」が叫ばれると、隻腕、隻眼のアストライ將軍が屹立して、これに唱和した。いよいよ、ウ

ナムーノがゆっくりと立ち上がった。そして、アストライ將軍がそのように血を求めるのは、自分と同様に傷だらけになった他者を見たのでは、とほめかけたのだった。將軍はこれに対して「死んでしまえ、インテリども！」と叫んだ。再び、ウナムーノは静かに語りかけた。「ここは知性の大寺院であり、私はこの上級聖職者である。（中略）あなた方は勝利するかもしれない。十分以上の暴力を持っているから。（中略）あなた方は自分たちに欠けているものを必要とする。それはあなた方の戦いにおける理性と正義だ。私は、あなた方にスペインのことを考えるよう説いても無駄だと考えている」

ウナムーノはその直後から自宅軟禁となった。そして12月31日午後4時半頃、家人が気づかないまま静かに息を引き取ったのだった。

偶然、2019年1月12日の『朝日新聞』（夕刊）の「惜別」欄に私の目が留まった。「文章武器で、福島で戦った」というタイトル。福島第1原発から25km地点の自宅で体の不自由な夫人を介護しながら『原発禍を生きる』を上梓し、中国語、韓国語、スペイン語に翻訳・出版された佐々木孝さんが、2018年12月20日に亡くなった記事であった。私には、ウナムーノと佐々木さんが重なって見えたように思えた。

書評

**川成 洋**  
Yo Kawanari  
1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士（一橋大学）。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家（合気道6段、杖道3段、居合道4段）。書評家。主要著書：『青春のスペイン戦争』（中公新書）、『スペイン—未完の現代史』（彩流社）、『スペイン—歴史の旅』（人間社）、『ジャック白井と国際旅団—スペイン内戦を戦った日本人』（中公文庫）他。